編集後記

大分県地方史二〇二号をお届けします。今回は、有働智奘氏の「豊国における仏教伝来と八幡神の諸問題」、佐藤末喜氏の「狭間氏について」、甲斐素純氏の「豊後の明珠～梅園・蘭室そして万里～（上）」、岡部富久市氏の「ほうちょう物語（豊後「ほうちょう」伝承の真相）」の四論文を掲載いたしました。

有働氏の論考は、豊国への仏教伝来について、渡来人との関係から再検討を加えたもので、応神天皇在位期と考えられる四世紀後半から欽明天皇在位期の六世紀にかけてわが国と政治的に良好な関係にあった百済から宇佐を中心とする北部九州、筑豊地域に渡来した「秦氏」らによって既に同国において神仏習合していた宗教「韓国神」のかたちで伝えられたと述べられています。これが宇佐の土着の神と結びつき、さらに彼ら渡来人と畿内大和政権の蘇我氏ら勢力と関係が強まるなかで、応神天皇と習合した八幡神が生まれたものといわれています。

佐藤氏の論考は、大友氏の系図で成立や書写年代（嘉元二年頃）で最も古いとされる「野津本大友系図」の内容と、豊後国図田帳の検討を通して、狭間氏の初代から三代までの人物を確定し、その所領の伝領について論じられています。狭間氏は、大友二代親秀の四男の直重（野津本では直秀）に始まり、二代重泰（野津本では親直）、三代直親（野津本でも同じ／童名　土用鬼丸または土与鬼）と続いたこと。その所領である阿南荘の惣地頭職半分と松富名の地頭職は、初代直重が父である大友二代親秀から嘉禎二年に他の兄弟・姉妹とともに譲られ、直重亡き後は一時妻の「狭間尼公生蓮」に引き継がれた後、子の重泰、孫の直親へと伝えられたと述べられています。

甲斐氏の論考は、三浦梅園が「明珠」（明るい珠）として将来を嘱望した脇蘭室を、彼と交友のあった師梅園をはじめ、同じく師と仰いだ大坂の懐徳堂主中井竹山、弟子の帆足万里や広瀬淡窓、勤王家高山彦九郎などの目をとおして、その人物・学問を論じたものです。上、下にわたる力作ですが、今回はその最初の部分を掲載いたしました。

岡部氏の論考では、大分を代表する食べもの「ほうちょう」は、もともと神奈川県を本貫地とし鮑の食文化をもつ大友氏が、手延法による饂飩の製法を伝えもつ万寿寺の技術を学んで「鮑の腸の魅力的な味覚を麺食品によって再現」させたものと述べられています。料理に時間を要する「ほうちょう」は、江戸時代に農作業に追われる農民に取り入れられるなかで、麺をうどん状に引き延ばす手間を除いた「だんご汁」へと変化していったともいわれています。さらに「ほうちょう」の語源は「鮑腸」であり、それは鮑の長い腸管（実際には鮑のどこを探してもない）を意味するものではなく、「はらわた（臓器）」を意味したという指摘もされています。

以上、各氏論文の内容を簡単に紹介させていただきましたが、たいへん興味深い論考ばかりであり、是非熟読されますことをおすすめいたします。

（武富雅宣）

平成二十（二〇〇八）年二月二五日　印刷
平成二十（二〇〇八）年二月二九日　発行

大分県地方史　第二〇二号

編集者　武富雅宣
発行者　豊田寛三
印刷者　廣永晴巳
印刷所　有限会社　舞鶴孔版
〒八七〇－〇〇二二
大分市大手町二丁目三－四
（☎〇九七－五三二－四二三一）

発行所
〒八七〇－一一二四
大分市旦ノ原七〇〇
大分大学教育福祉科学部国史研究室内
大分県地方史研究会
（振替・〇一五八〇－二－五二九四）

事務局　大分県立先哲史料館
〒八七〇－〇八一四
大分市大字駄原五八七－一
（☎〇九七－五四六－九三八〇）